

先人の足跡2―使命感―

## 「五族協和」の国の特攻隊

和田 昭 陸士60

### 南満洲にB29の来襲

昭和7年3月、今の中国東北部に満洲国という国家が日本の主導で新たに建国されました。漢民族、満洲族、蒙古族、朝鮮族それに日本民族を加えた五族による、万里の長城北側の広大な地域での新国家でした。

大東亜戦争中、満洲国は日本の重要な戦略拠点でした。そのためアメリカ空軍B29によるサイパンから本格的日本本土空襲が始まる前、まず中国奥地から南満洲の重工業地帯が狙われました。

それは昭和19（1944）年12月7日でした。「B29約70機の編隊、成都を発進し、北上中」との情報が、南満洲を防衛している日本の関東軍と満洲国軍の航空隊に入りました。

満軍では午前3時非常呼集があり、待機命令が出ました。当時南満の空の防衛の指揮は、満洲国軍航空隊の野口雄二郎中将が任命されていました。

野口中将は、昭和14年のノモンハン事件当時、飛行戦隊長としてソ連空軍を大いに悩ませた方です。

予備役となつてから満洲国軍に転

じ、奉天市（現瀋陽市）西約15キロの陸軍航空学校の校長に任ぜられました。B29は中国大陸を北上し、刻々情報により、南満洲襲来が確かとなりました。満軍の保有する戦闘機は百機

余りありましたが、その大部分が旧式の九七式戦闘機でした。8年も前の設計で、武装は小銃と同じ口径の7・7ミリ、エンジンは7百馬力とセスナ機程度でした。引つ込み脚となつてスピードの出る新鋭機は、日本の関東軍でも各機種備えていましたが、その時点では満軍にはほとんど提供されていませんでした。その関東軍航空隊も、多くをフィリピン等南方戦線に派遣され、手薄の状況でした。

また九七戦は滞空時間が短いため、何時に発進するかの判定が重要でした。

午前11時頃、奉天から約80キロ南の鞍山製鉄所の方向に向かってるとの情報が入るや、野口司令官は攻撃命令を出し、全25機が勇躍離陸しました。

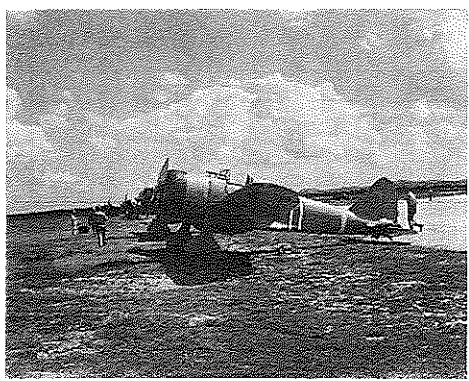
### 春日中尉機の体当たり

敵機は7千2百メートルの高度で奉天南方に姿を現し、10機前後の編隊で第1波、第2波と2〜3分間隔で奉天地区に侵入してきました。その中の1編隊が奉天北方の上空でUターンし、

南方に進路をとつた一瞬でした。

迎撃隊の1機が前方から降下し体当たりと見るや、B29は左に傾き鈍挫み状態で墜落してきました。満軍の高射砲陣地からは、小さな点のようなものが落下して来て、体当たりしたように見えました。

体当たりしたのは、満軍の春日園生中尉でした。敵編隊の高度に何とか達しようとして機体を軽くするため機銃を取り外し、覚悟の壮烈な攻撃でした。晴天下白昼、大都市上空での衆人環視の下、満洲初の体当たりが市民に与えた感動は計り知れないものでした。



写真/ Wikipediaに掲載された九七式戦闘機の写真

春日中尉は満洲の防衛の任務を重く受け止め、お母さんのみち子さんに遺書を残しています。

遺書（昭和19年3月）

この国に生まれて何か望むべき死ぬも生きるもただ大君のため大君の御楯と起ちて空征かば雲染む屍わが願ひなる

すめらぎに事えまつらむまごころは春にさきがけ散る梅の花

母 上様

園生

母みち子さんは、幼いころの春日中尉の思い出を述べています。要旨を一つお伝えしましょう。

「園生が未だ4歳の頃でした。私が強い頭痛で寝込んでしまい、荒町のお医者さんに薬を貰いにやつた事があります。生憎急な雨で雷が鳴り出しました。どうやって戻ってくるだろうと心配していると、お母ちゃんたたいまお母ちゃん”返事をするにも声が出ないでいると、雷が落ちなかつたよう。先生来てくれるつて言つたよう」と泣きながら入つてきました。どんなにか恐かつた事だろう。勇気を奮めてやりたい気持ちでした。それからお勝手に入つて水道に手が届かないのでいろいろ集めて足台を作り、水に浸したタオルを絞れぬままに私の額にのせ、”はい、お母ちゃん”と優しい子でした。園生が幼稚園の頃でした。主人が軍人だったので演習地で病気になる、陸

軍病院に入院したことがあります。

「お父様がおつとめ出来なくなつたらどうしようね」と言つたところ、「お母さん、僕と二人で八百屋さんになろうよ。お母さんが車を引いて歩けば、僕が後を押してあげるよ」といたわつてくれました。あの子の事を思う時は、いつも、何の涙か判らないものが滲み出てきます」

### 西原少尉機の体当たり

2週間程して、12月21日午前3時頃、B 29が40機の編隊で中国奥地発進との情報が入りました。野口司令官は、10時30分、迎撃の10数機に離陸を命じました。満軍機は前回と同じ九七式戦闘機が主体で、7千メートルの高度で待ち受けました。満軍飛行隊の西原盛雄少尉は、B 29第2梯団をとらえ、正面から攻撃しましたがなかなか目標を捉えられません。10分程して遂に、第4梯団10機に水平真正面から突入、3番機の左外側エンジンに、プロペラが噛み合う様に激突しました。

B 29は錐搦み状態で墜落、奉天市街から南西約25キロ程の池に墜落しました。西原機は空中で四散、体は離れて落下傘で降下してきましたが、戦死されてしまいました。航空学校に近かつたので、野口司令官が直々に西原機を探し、そのプロペラが西原機のものである事

を確認しました。

西原少尉も、春日中尉と同じく機体を軽くし、敵の高度以上で待ち受けるため、進んで機銃を取り外しての離陸でした。

お二人は、満軍の軍官(士官)学校で日本人卒業生1期と2期生として教育を受け、士官となつたのです。

### 満洲国軍に身を投じた日系士官の使命感

建国間もない頃の満軍は背反逃亡が続き、ほとんど匪賊に近い軍隊であつた。我々はその中に身を投じ、時には兵の銃弾に倒れても悔いるところなく民族協和の使命達成のため捨て石になろう。埋もれ木となつても甘んじよう。これが建軍当初から受け継いだ、日系士官の使命感でした。只管おごることなく、奉仕に徹する事で、新国家の理想実現に励んでいたのです。

軍官学校の日系生徒達に好んで歌われた軍歌に、「日系軍官の歌」があります。

一、北黒龍の水千里  
南方里の長城を  
限る五色の旗の下  
王道築土建設の  
光輝を浴びて 我は起つ

### 二、軍籍とおく大陸の

満洲軍に投ずれど  
変わらぬ鉄の大和魂  
祖国の誉れ身に負いて  
暗雲薙ぎ払う この力

満洲国ではその偉勲を讃えて「蘭花特別攻撃隊」の名を贈り、国を挙げて賛美しました。

### 満洲国皇帝の紋章が蘭の花でした。

蘭花特別攻撃隊の歌も出来て広く歌われました。一番を紹介します。

### 「空に咲く」

つもる吹雪を煙とまいて  
続け戦友よと満洲野をければ  
凍るまつげに朝日かけ  
いざやいざ、空征かば雲染む屍

### 蘭花特別攻撃隊

戦後帰国して俳優として有名になつた、当時満洲の電電公社に勤務の森繁久彌氏の作詞になるものです。旧式の九七式戦闘機を駆つてのB 29迎撃はお二人にとりこの精神の体現であつたと考えられます。

B 29の南満州空襲では、日満両航空隊の協力により撃墜は併せて25機以上に達しました。うち4機は、日本の関東軍航空隊機の体当たりの尊い散華に

よるもので、2機は体当たり後生還されていきます。西原少尉と共に迎撃した満軍機では、松本太平洋少校(少佐)が一式戦闘機で立ち向かいましたが、敵機の集中射撃を浴びて撃墜戦死されました。

大東亜戦争を通して体当たりによるB 29撃墜は44機ありましたが、九七式戦闘機によるものは、満軍のこの2機だけでした。

体当たり攻撃により身を犠牲にして祖国に捧げたすべての特攻隊員の御霊に尊崇の心を捧げると共に、満洲軍という特殊な環境にあつて、多くの劣悪な条件を甘んじて受け入れての、このお二人の果敢な姿に、先人達が抱いていた祖国愛の精神を偲びたいと思ひます。

### 筆者追記

筆者は、軍官学校6期生として予科に在校中航空兵科に指名され、春日中尉、西原少尉の体当たり後1カ月余りして、満軍新京航空隊の基地に見学に行きました。丁度慰問団が来ていて、航空隊員の方々と共に「蘭花特別攻撃隊の歌」を聴いた感激を忘れられませんが、その後、戦後帰国した先輩達からの証言や、同窓会の冊子等を元に、中高生向きに書かせて頂きました。